

宮崎県の美術史について

前高鍋町美術館館長

石井秀隣

目次

はじめに

宮崎に関連した画家たち

〔児島虎次郎〕

〔岩尾信夫〕

〔辻野精一〕

〔有田四郎〕

〔野口徳次〕

〔太佐豊春〕

〔塩月桃甫〕

〔吉加江京司〕

〔仲矢勝好〕

〔山田新一〕

〔瑛九〕

〔杉下昭明〕

〔古川重明〕

〔平原美夫〕

〔道北昭介〕

〔サイタ亨〕

〔小野彦三郎〕

〔上村次敏〕

〔新原峻吉〕

〔井上自助〕

〔坂本正直〕

〔出水勝利〕

〔宮崎正二〕

〔鳥原茂之〕

〔長谷場三夫〕

〔河野扶〕

〔川越彌録〕

〔末原晴人〕

〔松井富民夫〕

〔彌勒祐徳〕

〔黒木貞雄〕

〔雨田正〕

〔石井秀隣〕

〔岩下資治〕

〔吉田敏〕

はじめに

私に与えられた演題が「宮崎県の美術史について」ということです。私は体系づけた宮崎県の美術史を語るほど、専門的に勉強しているわけではありません。

そこで、今回県立美術館が二〇〇七年に開催した「宮崎の洋画一〇〇年展」の時のパンフレットを使い私が交流のあった方たちの作品を見ながら進めていきたいと思えます。

現在の県庁所在地に新幹線も高速道路もないのは我が宮崎県他どこがあるでしょうか。

宮崎県は、その意味でも後進県のように思われます。このことは日向一國を一番で治めるような大名がおらず、その後の政治の中の人材不足、経済力の弱さに繋がったのだという人がいます。

日本の洋画史の変革の局面には、西日本出身の画家たちが登場します。残念ながら宮崎県出身者ではありません。やはり宮崎県には画家を育てるような大スポンサーや表舞台に引き上げることのできる力のある人物がいなかったという事も事実ではなからうかと思えます。しかし、地理的空間の差、情報伝達の時間の差等、現在は昔では考えられない時代になりました。この宮崎からきつと近い将来、歴史に残る作家が輩出することでしょう。

では、宮崎に関連した画家たちを紹介しましょう。

宮崎に関連した画家たち

「児島虎次郎」について



「少女像」制作年不明

岡山県の出身ですが、孤児の父と謳われる石井十次の長女と結婚されたので、宮崎との縁も深い人です。東京美術学校卒業後、ベルギーの美術学校に留学をしています。今日までこの美術学校を外国人が首席で卒業したのは彼一人だそうです。出身地にその時のデッサンを中心に展示した美術館がありました。実には力強いデッサンです。大原奨学金で勉強したのですが、彼が集めた作品が倉敷の大原美術館の始まりです。児島の目で集めた作品に大原も要求通りの金額を送金したそうで、まさしく素晴らしい人間の出逢いだったと思います。ちなみに大原は、最初は児島の作品の為の美術館をと考えていたそうです。私が生徒であった頃は茶臼原の孤児院には庭先にルノアールの首像が無造作に置いてありました。美術学生の頃、「高鍋に来てごらんよ、ルノアール等は庭先に置いてあるよ」と威張っていたのですが今は立派な台座をつけて室内にあるそうです。私は、その後見ていません。

「有田四郎」について

鎌倉にアトリエを造るのですが「主婦の友」に赤いアトリエとして掲載されると見物人が絶えなかったため、引き払って宮崎に来ま

す。宮崎から「主婦の友」の表紙絵を、毎月送っていたそうです。有島生馬等、白樺派の人達との交流が盛んでした。何故宮崎から「主婦の友」の表紙絵を送るような関係だったのかと思っていたので、娘の楨さんに直接お聞きすると、「主婦の友」の社長さんも白樺派なので、その縁からでしょうということでした。

タヒチにあこがれて、タヒチ行きを考えるのですが、奥様が「宮崎はタヒチぐらい辺地だから、タヒチの代わりに宮崎にしたら」と言われ宮崎にこられたのだそうです。奥様は、高鍋高等女学校の先生をされました。有田四郎は、延岡中学校と宮崎師範学校で教鞭をとりますが（後になって高鍋中学校でも教えている。）多くの人に影響を与えています。後述しますが直接私と関係があるのは河野扶と平原美夫です。



「霊峰霧島」1940（昭和15）

有田四郎は、長身で彫りの深い顔立ちで日本人離れをしていたと言われています。剣道をよくされていたそうです。高鍋の住まいはガラスを多様したモダンな建物で、川南町十文字に牧場を持っていたそうで引き揚げる時に全部無償で小作人に分け与えたとの事です。その時の牧場から描いた絵が延岡高校に保管されています。多

分県内に現存する作品ではそれが一番大きいはずです。

「塩月桃甫」について

台湾美術界の大御所的存在でしたが、敗戦後郷里の三財に引き揚げました。私は、旧制中学校一年生のときに一年間高鍋中学校で教わりました。翌年には、宮崎師範の先生として転勤されました。

先生は禿で頭髪が一部だけ残っていました。それを鬢付けか何かで屏風のように一列に立てておられました。ルバシカのような服を着て、麝香じやくかうのような匂いがして教室中が頭が痛くなるような強烈な



「舞子」1949（昭和24）

香水をつけていました。大変な存在感を持った人物で、私は新任式の模様を鮮明に記憶しています。「日本人は、古来髪の毛は後ろから前に伸ばしていたのだ、それを西洋かぶれして前から後ろに伸ばしている。」と言って壇上でぐるりと一回転されて自分の頭髪を見せられました。それが新任の弁でした。翌日の日向日日新聞は、早速それを取り上げて「某中学の悪童連をあっと言わせた。」という記事になっていました。私の友人が杉の木をヴァーミリオンで真赤に描いて非常に褒められました。今考えるとフォーブ風の強烈な絵を目標として指導していたと思います。